
霧の中で待つ少女

へべれけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

霧の中で待つ少女

【Nコード】

N3331Z

【作者名】

へべれけ

【あらすじ】

深い霧に包まれたとある場所。

そこにはひとつの駅があった。

あたりには何も無い。

そんなところで一人の少女がとある人を待ち続けていた。

「おかあさん、おかあさん」

そう呼びながら。

第一話 少女(前書き)

初めての投稿です。

まだまだ稚拙な文ですがよろしくお願いします。

感想、批評など、どしどし下さい。

第一話 少女

第一話 少女

「おかあさん、おかあさん」

白いもやが一面に広がっているとある場所。見渡す限り、辺りは白一色で何も見えない。

しかし、その中にさびれた駅とその前に線路が敷いてあるのが見えた。

どこからともなく聞こえてきた幼い声。

それは少女のものであることが予想できる。

ポーン ポーン・・・

何か、跳ねる音が辺りに響わたる。

その音は、駅の小さな影から聞こえてくるものであった。

ぽおん ぽおん・・・

規則的に響き渡るその音は、駅にいる少女がボールを跳ねさせているものであることが分かった。

「おかあさん、おかあさん」

ボールを付きながら自分の母の名前を呼び続けている少女。

髪の毛は眉の上できちんと整えられている、いわばおかつぱ。

そして花柄の模様が描かれている着物を着ていた。

そんな、座敷わらしのような女の子が規則的に母を呼びつつ、ボールを付き続けていた。

・・・

そんなことを続けてどれくらい経ったであろうか。

少女はバウンドしてきたボールの勢いを吸収するように自分の胸元に抱えた。

そして、後ろにいるベンチの影に向かって言葉を投げかける。

「ねえ、おかあさんまだかなあ」

振り返り、くりつとした大きな目でベンチの影を見つめる少女。

その目線の先には、茶色がかった帽子を深くかぶった、スーツ姿の男性が座っていた。

だが、深くかぶっているためかどんな顔をしているのか分からない。しかし、両手を杖で支えながら少し前かがみに座っているその姿は、人を寄せ付けがたい、そんな雰囲気を感じさせた。

その男性は少女の言葉に対して少し身じろぎをした。

そして、

「まだ、だろうなあ」

と、少ししゃがれた声で応えた。

「そっかあ」

その、のんびりとした声を聞いた少女はまた、敷いてある線路の方を向きボールを付き始めた。

「おかあさん、まーだかな

おかあさん、はーやく、こないかな」

ボールのリズムに合わせて歌いながらつぶやき続ける。

姿だけ見ると、小さい女の子がただお母さんの迎えを待っている、そんな印象をうける。

しかし、周りに全く何も無い、白い霧に包まれている駅で、ボールを付き続けるその姿はとても異質なもののよう感じられた。

少女にとって。

ここがどこだか全くわからない。

気が付いたら、たくさんの人が乗っている電車に乗っていて。

気が付いたらこの駅に下ろされていた。

ただ、電車に乗る前に、誰かの泣いているような顔を見た気がした。胸の中につつかかるような感覚。

そんなものを抱えながら訳も分からないまま、この駅に下ろされた少女。

これからどうすればいいんだろう。

そう思っつて、一緒に電車から降りてい駅の下り階段へと向かっていく人々に付いていこうとした。

しかし。

おかあさんに会いたい。

なぜか、そんな気持ちが胸からあふれそうになった。

おかあさんって何だろう。

自分にとってのおかあさんって何だろう。

全く思い出せなかった。

でもなぜだかわからないけど。

おかあさんのことを思いだそうとすると、胸が少しキュツとなると同時に。

温かい気持ちが広がるのを感じた。

とても心地がよかった。

会えたら自分どんなになっっちゃうのかなあ。

そう思っつて、少し含み笑いをしたり、色々な自分にとってのお母さんの想像をしながら。

少女はこの駅で自分の母を待ち続けていた。

「はやく、はやく。」

こゝないかなっ

歌を唄い終わつた瞬間、少女は今までより少し強くボールを跳ねさせ、そして落ちてくるボールをキャッチした。

「おそいなあ」

そのボールを抱え込んでしゃがみ、少女は線路のずっと先を見つめる。

線路の先は白い霧で全く見えない、見えてもせいぜい10メートル先ぐらいだ。

しかし、むしろそれは少女の豊かな想像力は加速させた。

一体どこまでつながってるのかな。

どこからきているのかな。

そんなことを考えながら、少女は前のめりになって自分の目の前の黄色い線を越えないように自分が来た方向を見つめ続けていた。

「・・・」

早く電車こないかな。まだかな。

早くお母さん来ないかな。まだかな。

そんなことを考えると、少女は自分の体がそわそわし始めるのを感じた。

もしかしたら、少女のボールを付き続ける行動というものは自分のはやった気持を抑えるための行動なのかもしれない。

(もういいや)

少女はそう思い、またボールを付こうとしゃがみこんでいた自分の身体をすっと起こして立ち上がった。

急に立ち上がったためか。

少女は立ちくらみを起こしてふらふらと身体がよろめいた。

そして、黄色い線を越えようとした、その時。

「いやあっ！」

少女はいきなり声をあげて線の外側へとしりもちをついて倒れた。口をぱくぱくとさせながら、少女は線路を見つめる。

その目には怯えと恐怖の感情が浮かんでいるのが分かった。

あれ？なんでなんかな？

少女は大声をあげた自分にびっくりしていた。

とりあえず、立ち上がろうと両方の手に力をいれる。

しかし、足が震えて立ち上がることができなかった。

あれ？あれ？

なんで立てないんかな？

少女の頭の中にそんな疑問が浮かぶ。

それと同時に何だか泣きたくなるような、そんな気持ちに襲われた。

「・・・何で立てないんだよ・・・」

ぐっと力を入れても身体が言うことを聞いてくれない。

それが少女の焦りと不安を加速させる。

なんで立てないの？

なんでこんないやな気分になるの？

そんな考えに苛まれている少女の前に。

いつの間にか、先ほどベンチに座っていた男性が黄色い線の上に立っていた。

その男性は深くかぶった帽子を少しだけ浅くしており、顔がちらつと見える。

顔はしわがたくさん刻まれており、たくさんのひげが生えていた。

大体、60歳くらいの年齢であると推測できる。

そして、一番の特徴として。

その男性は瞳が青かった。

少女は怯えたようにその男性の瞳を見つめていた。

「おじいちゃん、そこ、危ないから

だめっ・・・だめだよお・・・」

少女は泣きそうな顔で初老の男性に懇願するように声をかける。

何で泣きそうになっているのか自分では全く分からなかった。

けれども、とつても怖くて、とつても嫌で、とつても痛い。

なぜだかわからないけど、そんな漠然とした思いが胸の中で自分を苛めている。

そんな気がした。

少女は、男性の足にすがりつくようにして引っ張って、線路から遠ざけようとする。

しかし、男性は全く動かなかった。

立ったまま少女を見下ろして、哀れんでいるのか悲しんでいるのかよく分からない複雑な表情を浮かべていた。

しばらく、泣きべそをかきながら引っ張ろうとする少女を見つめていた男性はしゃがみこんで、少女の頭を自分の胸へと寄せた。

「怖かったろう、大丈夫、大丈夫だ」

しゃがみこんだ男性のその表情には少女を安心させようとする、優しさに満ちているものがあつた。

「だめだよお、危ないよお・・・」

「大丈夫、大丈夫」

男性は少女に言い聞かせるように優しく言う。

すると、徐々に少女の顔が恐怖から安堵の表情へと変わっていくのが分かった。

なんだろう・・・あつたかいなあ・・・

少女は男性の胸になかでそんなことを思っていた。

なぜだか分からないけど。

だけど、今度はほっとしたせいか少女は目頭が熱くなってくるのを感じた。

だめ、すぐに泣いちゃだめ。

自分に言い聞かせて我慢しようとする。

我慢している少女の顔は膨れ上がったふぐのようで、男性は思わず吹き出しそうになったがここで笑ったらだめだとなんとか自分に言い聞かせた。

「我慢しないでいい、泣いてもいい」

前者の言葉は少女に投げかけたのか自分の本音を言ったのか分からなかったが、後者の言葉は間違いなく少女に向けてのものだった。

少女は自分が泣きそうなることを知られて、少しびっくりしたが、次の瞬間せきをきったように、涙が目からあふれ出した。

「う・・・うう・・・」

それを見られなくなかったのかどうか分からないけれども、少女は男性の胸の中に顔をうずめて、うめくように泣き始めた。

男性は少女の頭に手を乗せてやっていた。

「怖かったろう、もっと泣いてもいい」

「うう・・・怖かった、怖かったよ・・・」

少女の顔が涙でぐちゃぐちゃで、何を言っているのか聞くことも困難だった。

（あつたかい）

そんなことを少女は思う。

なんだろう。おかあさんみたいだなあ。

するとさらに涙があふれてくる。

「怖い、怖かった……」

「大丈夫、大丈夫」

なんで、このおじいちゃんはこのことをあたしに言ってくれませんか？

考えたけれども、分からなかった。

なんで、あんなに怖かったんだろう。

それも疑問に思ったけれども、分からなかった。

なんで、あんなに嫌な気持ちだったのに、この人に抱きしめられるとすぐになくなったんだろう。

男性の胸の中で泣きながらそんなことを疑問に思っていた。

けれども。

（まあいいか）

そう思いながら、温もりを感じながら少女は男性の胸の中でしばらく泣き続けていた。

第一話 少女（後書き）

不定期更新になると思いますが、頑張つて早く更新したいと思つて
ます。

ので、何卒よろしく願ひします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3331z/>

霧の中で待つ少女

2011年12月11日15時00分発行